



**Data**

監督: ハイファ・アル＝マンスール

出演: エル・ファニング / ダグラス・ブース / トム・スターリッジ / ベル・バウリー / ステイーヴン・ディレイン / ジョアンヌ・フロガット / ベン・ハーディ / メイジー・ウィリアムズ /

## 👁️👁️ みどころ

世界文学全集好きのあなたなら、『高慢と偏見』のジェイン・オースティン、『嵐が丘』『ジェーン・エア』のエミリー・ブロンテ、シャーロット・ブロンテ姉妹等のイギリスの有名な女流作家を知っているはずだが、メアリー・シェリーを知ってる？もっとも、メアリーを知らなくても、彼女の分身ともいえる、怪物フランケンシュタインは知っているはずだ。

時は18世紀末の産業革命期のイギリス。孤独な少女時代を過ごすメアリーはスコットランドで天才詩人のパーシーと出会って有頂天。妻子があることを知った父親の猛反対を押し切って駆け落ちし、子供まで生まれたが、自由恋愛思想の塊のような男は困りもの。たちまち、彼女は不幸のどん底に……。

しかし、そんな不幸な体験と“生体電気ショー”で知った(?)“死者を甦らせる術”への興味の中、メアリーの頭の中には幻とも現実ともつかない怪物の姿が形成されていくことに。

2004年には、綿谷りさ、金原ひとみの2人の若手女流作家が芥川賞を同時受賞したが、さて、あの時代に処女作の怪奇小説を発表したメアリーの作家としての名声は？私たちがフランケンシュタインは知っていても、メアリー・シェリーは知らない理由を、本作を鑑賞しながらしっかり考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■女流作家メアリー・シェリーを知ってる？■□■

『メアリーの総て』のメアリーって一体誰？本作の主人公になるのは16歳から20歳までのメアリー・シェリーだが、メアリー・シェリーって一体誰？それは、18世紀末に

イギリスのロンドンに生まれ、16歳で詩人パーシー・ビッシュ・シェリーと駆け落ちし、19歳で結婚し、20歳で「フランケンシュタイン」を匿名で発表した女流作家のこた。しかし、「フランケンシュタイン」は知っていても、その「生みの親」とも言うべき女流作家メアリー・シェリーを知っている日本人は少ないのでは・・・？

今日まで何度も映画化されるほど有名な怪物『フランケンシュタイン』を今から200年前に生み出したメアリー・シェリーは、『高慢と偏見』のジェイン・オースティン、『嵐が丘』のエミリー・ブロンテ、『ジェーン・エア』のシャーロット・ブロンテらと並ぶ女流作家の一人だが、日本人はあまり知らないはずだ。『高慢と偏見』は『プライドと偏見』(06年)、『シネマ10』198頁)とタイトルを変えて映画化され、そのヒロインは次女役のキラ・ナイトレイと長女役のロザムンド・パイク、また『ジェーン・エア』(11年)、『シネマ28』224頁)のヒロインはジェーン・エアー役のミア・ワシコウスカだった。

メアリー・シェリーの波乱に満ちた人生は、これまでヴェールに包まれてきたらしい。それを映画化したのは、何とサウジアラビア初の女性監督で、『少女は自転車にのって』(12年)で一躍有名になったハイファ・アル＝マンスールだ(『シネマ32』86頁)。そして、メアリー・シェリーを演じるのはダコタ・ファニングの妹であるエル・ファニング。彼女は1998年生まれの20歳の美女だから、16歳～20歳代のメアリーを演じるには最適だ。さあ、本作ではじめて知った女流作家メアリー・シェリーによる「フランケンシュタイン」の誕生秘話とは？

## ■近代化とは？産業革命は？文学・思想は？女性解放は？■

市民革命こそ1789年のフランス革命に遅れたものの、18世紀末のイギリスは産業革命が進む中で近代化が推し進められた時代。近代化の波は産業革命ばかりではなく、科学や哲学の分野の他、文学や道徳の分野でも進んでいた。私はメアリー・シェリーについて知らなかったのだから、その父親が急進的な思想家たるウィリアム・ゴドウィン(スティーヴン・ディレイン)であったこと、母親もフェミニズムの先駆者たるメアリー・ウルストンクラフトであったことも当然知らなかった。『マルクス・エンゲルス』(17年)を見た時は、当時のドイツの最先端の哲学であったヘーゲルの哲学を「世界を解釈しただけだ」と批判し、実践の重要性を主張したマルクスとエンゲルスの姿に感銘を受けた(『シネマ42』226頁)が、イギリスでは産業革命が急速に進む中、社会科学の分野でもメアリーの父親や母親のような先駆的な人物が登場していたわけだ。

もっとも、母親はメアリーの出産後に産褥死しているため、本作導入部では、後妻のクレアモント夫人が取り仕切る家の中で、メアリーが孤独を深めていく姿が描かれる。クレアモント夫人の連れ子で、メアリーの人生に大きな影響を与えた義妹のクレア(ベル・パウリー)は一貫してメアリーの味方だが、父親が営む本屋の店番もせず、いつも死んだ母親のお墓の前で本ばかり読んでいるメアリーは、クレアモント夫人にとってはうっとうし

いだけの存在だったらしい。そんな家庭内のいざこざを立派に取り仕切ることこそ、家長たる父親の仕事だが、本作に観るように、ウィリアムは家庭内のいざこざを避けるにはメアリーをスコットランドの友人バクスターのもとへ預けるのがベストと判断し、メアリーもそれに同意したため、メアリーはスコットランドへ旅立つことに。

16歳にして尊敬する父親と離れるのはメアリーにとって寂しいことだが、スコットランドでは天才詩人のパーシー・シェリー（ダグラス・ブース）と出会えたうえ、2人はすぐに恋に落ちたから、メアリーにとってスコットランド行きはラッキー。しかし、天才詩人といわれたパーシーの詩以上に私が興味深いのは、パーシーの自由恋愛の思想。文学や詩をやっている人間にはその手の志向性を持った男が多いが、本作を観ているとパーシーはそれが徹底しているからすごい。もっとも、それは男にとってあまりに都合のいい話のようにも聞こえるが、さて・・・？本作の鑑賞を契機として、メアリーの父親の思想と母親のフェミニズム論についても、しっかり勉強しなければ。

## ■□■メアリーは意外にまとも？クレアの方が変人？■□■

本作と同じ頃に観た、東野圭吾の原作を映画化し、木村拓哉と長澤まさみが共演した『マスカレード・ホテル』（19年）では、ホテルに来館する“ヘンな客”のバリエーションが面白かった。それと同じように（？）本作でも、メアリーが結婚する天才詩人のパーシーはもちろん、その友人の詩人バイロン卿（トム・スターリッジ）もかなりの変人だ。メアリーの父親ウィリアムが再婚したクレイモント夫人は当時普通の女性だが、その連れ子でメアリーと同年の娘クレアもかなりの変人。まともなのはバイロンの侍医ジョン・ポドリ（ベン・ハーディ）だけで、パーシーもバイロン卿も極端な自由恋愛主義者だし、公言しないものの、クレアもその最たるものだ。それに比べると、父親の反対を押し切ってパーシーとの駆け落ちに同意したメアリーは、この決断こそあつと驚くものだが、その後の堅実な生活ぶりを見ていると意外にまとも・・・？

もっとも、メアリーは自分に言い寄ってきたパーシーに魅力を感じたからこそ恋に落ちたのだが、パーシーには婚姻した妻と、その妻との間に生まれた娘までいることを知らされたら、普通は一歩も二歩も退くもの。現にメアリーの父親はそうだったが、メアリーはなぜそれを許したの？また、そんな男との駆け落ちが異常なら、それにクレアを連れて行くのも異常。自由恋愛思想の男・パーシーは、最初からクレアとも分け隔てなく接していたが、いつしかそれが男女の一線を越えたうえ、次第に公然と・・・。そうなると、普通はメアリーとクレアの仲も陰悪になっていくものだが、さて本作では？さらに、そんな“三角関係”のまま3人がバイロン卿のお屋敷に招かれたのは、実はクレアとバイロン卿がデキていたから、というから恐れ入る。当時の自由恋愛思想とその実践は凄いのだ。

18世紀末の産業革命時代のイギリスを舞台とした本作に登場する人物は、自由恋愛に関してはぶっ飛んだヘンな奴ばかりなので、それに注目！

## ■□■試練、試練。耐えて、耐えて。そこから着想と作品が！■□■

フェミニズムの先駆者たるメアリーの母親の思想と実践がどんなものだったのかは知らないが、彼女自身メアリーを生んだ直後に産褥死していることからわかるように、当時の妊娠と出産はかなり危険な行為。また、当時は避妊の理論も技術も発展していない上、『ヴェラ・ドレイク』（04年）（『シネマ8』335頁）で見たように、イギリスでは宗教上の理由によって人工妊娠中絶は認められていなかったから、当時は子供はたくさん生まれるものの、その死亡率も高かった。

本作では、第一子の女の子が産まれる頃までは、パーシーとメアリーの結婚生活は経済的にも精神的にも安定していたが、あまりの放蕩ぶりにパーシーが親から勘当されて経済的に干されてしまうと、借金取りに追われる立場になったから大変だ。雨の中、病気の赤ん坊を抱えて借金取りから逃げていくのも大変だが、逃げていく中で、子供が死んでしまったから、メアリーが悲しみに暮れたのは当然。そのうえ、クレアの紹介によって一家3人（？）がスイスのジュネーブにあるバイロン卿のお屋敷でお世話になる中、クレアがバイロン卿の子供を宿していることが判明したから、さらに大変だ。もともと、メアリーは自分が生まれるのと引き換えに死亡してしまった母親への罪悪感を持ち続けていたし、パーシーやバイロン卿の自由恋愛思想にもついて行けない自分を感じていたから、メアリーはパーシーやバイロン卿たちの世界観とは違う種類の人間だったらしい。

他方、パーシーとの束の間の幸せな時間にメアリーが見学に連れて行ってもらったのが「死者を甦らせる生体電気のショー」。もともと科学に興味を抱いていたメアリーは、これを見ると「ホントに死者を甦らせることができるの？」と質問をぶつけていたから、彼女の問題意識はホンモノだ。もし生体電気を飛ばすことによって死者を甦らせることができるのなら、何とんでも私の命と引き換えに死亡した母親に会いたい。メアリーの希望はそうだったが、試練、試練、耐えて、耐えての生活が続く中、メアリーの夢とも現実ともつかない、そんな問題意識から「フランケンシュタイン」の着想が生まれ、それが処女作の小説として完成してゆくことに！

## ■□■バイロン卿企画の“ディオダディ荘の怪奇談議”とは？■□■

手塚治虫が東京で活躍（？）していた若い時期に過ごしたのが、東京都豊島区にあったトキワ荘。手塚がその2階の四畳半の部屋に1953年に入居すると、出版社は自社の雑誌に連載を持つ才能ある若手漫画家をそこに次々と入居させたため、そこは“マンガ荘”というニックネームまでつけられた。トキワ荘の出身者には藤子不二雄、石森章太郎、赤塚不二夫等がいる。さらに、1996年には市川準監督、本木雅弘主演で『トキワ荘の青春』という映画まで作られている。

それに匹敵する（？）のが、雨が降り続くうっとうしい天気の中で、バイロン卿が気分

転換のために提案した、後日「ディオダディ荘の怪奇談議」と呼ばれる企画。これは、当時バイロン卿のお屋敷に長期逗留していた男女がバイロン卿の侍医であるポリドリを含めて、それぞれ自分なりの怪奇物語を作り、その優劣を競おうというものだ。どうやってその優劣を決めるのか等、このゲームはかなりいい加減なルールに基づくものだが、詩人のパーシーやバイロン卿以上に、メアリーが熱心になったのは「死者を甦らせる生体電気のショー」を見た刺激で、メアリーの頭の中に“フランケンシュタイン”のイメージが少しずつできかけてきたためだ。小説家が小説を書くシーンをいかにスクリーン上で表現するかは難しいが、ハイファ・アル＝マンズール監督はメアリーが夢とも現実ともつかない異様な世界の中で、必死に何かと格闘しながら自ら分身ともいえるフランケンシュタインの姿を創造し、そのフランケンシュタインがいかに成長し、いかなる物語を紡いでいくのかを実に見事に表現している。

そんなメアリー役を演じたエル・ファニングは、パンフレットの中のインタビューで「好きなシーンはどこでしょうか？」と聞かれると、「断トツで『フランケンシュタイン』を書くシーンね。」と答え、さらに「とても特別で大きなシーンだから緊張したけれど、素晴らしいシーンになっていて欲しいわ。」と答えているので、本作のハイライトとなるそのシーケンスには、とりわけ注目したい。なお、滞在者の中で最もまともで、最も知的なはずの男がバイロン卿の侍医のポリドリだが、彼も“吸血鬼”のインスピレーションが湧いたらしく、必死にそれを書き上げ、処女作の出版に至るので、それにも注目！

## ■□■処女作の出版は？条件は？売れ行きは？名声は？■□■

私は“モノ書き”が大好きだから、法律書から映画評論本まで広く執筆し、たくさん出版しているが、今ドキの出版事情の中で“売れる本”を出版するのは至難のワザだ。2000～3000部出版して原稿料と印税をもらえればオンの字で、自費出版になることも多い。もちろん、18世紀末のロンドンの出版事情は今の日本とは違うし、マルクスとエンゲルスが書いた『共産党宣言』（1848年）は爆発的な売れ行きになったはずだ。しかし、メアリーの処女作『フランケンシュタイン』の出版は？条件は？売れ行きは？名声は？

本作後半では、せつかく精魂込めて書き、パーシーからも「これは傑作だ！」という“お墨付き”をもらったにもかかわらず、原稿を持ち込んだ出版社からは、女性作家というだけで断られたり、ホントの著者は夫のパーシーだろうと疑われたり、思いもかけない苦勞を続けることになる。挙句の果てに、やっと出版できたものの、①パーシーの序文を入れること、②作者は匿名にすること、という条件が付けられたうえ、部数もたった500部だから、これでは私の出版事情より悪い。

ちなみに、日本では2004年に綿谷りさと金原ひとみという2人の若手女流作家が同時に芥川賞を受賞したが、それから14年、この2人はずっと第一線での作家活動を続けている。しかして、2018年12月25日付読売新聞「文芸月評」は芥川賞から14年

を経た今、綿谷りさは最先端、金原ひとみは王道を歩んでいると解説されているから、この2人は幸せな作家だ。それに比べると、メアリーの場合は、1818年1月1日、20歳の時にやっと前述の条件で『フランケンシュタイン』が匿名で出版されたものの、実名での第2版が出版されたのは5年後の1823年、第3版の出版は1831年、34歳の時だから厳しいものだ。また、私生活では、パーシーの妻が1816年に入水自殺をした後、メアリーはパーシーと正式に入籍し、その後も第二子、第三子、第四子、第五子を生んだが、成人するまで生き延びたのは第四子だけ。また、パーシーも1822年に、乗っていたヨットが転覆して溺死してしまうから、メアリーはトコトン不幸の星の下に生まれついたような生き方を余儀なくされることになる。

もっとも、本作では父親の書店で開催された『フランケンシュタイン』の出版記念パーティの席にパーシーが登場し、匿名の新作の著者はメアリーだと発表する感動的なシーンが登場する。しかし、これは現実ではなく、映画だけのフィクションだから要注意。ハイファ・アル=マンズール監督が本作をなぜこんなハッピーエンドで終わらせたのかはわからないが、『フランケンシュタイン』誕生秘話のホントの実態はしっかりパンフを読んで勉強する必要がある。そして、そんな誕生秘話がわかったうえで、再度あの『フランケンシュタイン』の物語を読み返せば、さらに興味が倍増するはずだ。

2018（平成30）年12月27日記